

## 故郷の風景 ～ 新築と増改築

### ■ 二つの風景

故郷を離れて暮らす人間にとって、懐かしい風景が変わらずにあることは心を和ませてくれるが、一方で思い出の風景が消えていくことは、自分の過去が疎かにされているような虚しさを覚えるものである。故郷仙台を離れた 1970 年代は日本中の風景が大きく変化した時期で、仙台の変わり方もすさまじかった。お年寄りから土地の言葉で昔からある店の場所を尋ねられた時、結局答えられずに愕然としたことがあった。川べりの香り高いネムの木が伐られ、小学校も中学校も川岸も思い出と共にコンクリートで押し固められていく。柔らかく温かいものから、硬くひんやりしたものへ、風景の激変が心に与える影響は恐らく若い人ほど大きいだろうと感じたものだった。

今住んでいる松代の農村地域では、仙台と違って古い建物が壊されることは比較的少なく、敷地に余裕があるせいかそれらは物置などとして捨て置かれて、隣に新しい建物が建つという風景になっている。捨て置かれた土蔵や、鉄板が被せられた茅葺きの建物に見入りながら、ドイツ人建築家のカール・ベンクスが『日本人は宝石を捨てて砂利を買っている』と言った言葉が浮かぶ。

### ■ 改修の仕事

建築の仕事に関わり始めた頃は、仕事と言えば新築が当たり前という時期(今でもしかりだろうが)で、改修の仕事は新築に比べると一段低いもののように扱われる空気があった。初めて改修工事の仕事に関われることになったのは、さほど昔のことではない。それは間口 3 間のウナギの寝床のような町家で、家主さんは別の場所に新居を建てて暮らしており、ただただ捨て置かれている建物で、社会福祉法人が精神障害者の作業所として改修を企図していた。「こんな古い建物が何とかありますか」と尋ねられて即答がはばかれたが、翌日再度建物を眺めていると、「長いこと待っていた」と言われているような気がして踏ん切りがついた。築 40 数年で、さほど古くはないが貫と土壁の家だった。その頃、改修工事の参考となる本はなかなか少なかったが、吉田桂二氏が 1985 年、すでに『増築・改造の知恵袋』(主婦と生活社)という住み手向けの本を著していた。その中で、「どんなに周到に考えて作った家であれ、いずれ必ず増築・改造をしなくてはならなくなる」とし、「その度に建て替え新築することの無駄・無意味さ」を論じていた。加えて「日本建築の美の極致と言われる桂離宮が二度以上の増築を経て美しい姿になった」ことをあげ、増築・改造が家の姿を美しくすると述べていた。あの桂離宮が増改築の末の姿とは……。桂離宮が急に身近

に感じられたが、調べてみるとやはり、とてつもないものだった。森蘊著『桂離宮』（創元社）によると、桂離宮は1620年(元和6年頃)代に創始され、1640年代に増築、1655年～57年に補修が行われており、計画の時期も含めればほぼ全体が整うまでに、八条宮家二代にわたり約40年を費やしている。しかも書院や茶室の建築群がその中で生き生きとつながる園池の地形は、さらに2百年ほど遡った歴史が背景にあるという。本物の建物、当然のことながらその異次元の奥深さを思い知らされた。



地域活動支援センター  
「あんだんて」  
(改修後)

#### ■日本人の住まい観

八条宮家の遠大な増築・改造計画には目を見張るが、かたや古びた建物を惜しげもなく捨て去る現代の風潮、国の政策の影響もあるだろうが、これらをどのようにとらえればいいのか。木と紙で造られた建物、災害の多い日本、そこには人も住まいも無常であるという考え方が根底にあるようだ。山田洋次は『映画をつくる』（国民文庫）の中で、日本人は住まいを“仮の住まい”ととらえていると述べている。「衣食住」の中で「住」を重視したイギリスと違って、日本は「衣食足りて礼節を知る」の国で「住」が前面には出てこない。栖も人もはかない、だからこそ、災害を柔軟にかわし、壊れてもすぐに補修ができて増築・改造がしやすい建物を造り、その中で美しくも移ろいやすい自然を繊細に取り込む工夫に知恵を絞る、結果ブルーノ・タウトに世界的奇蹟と言わしめた桂離宮のようなものができたと言えないだろうか。

一方では、政治や経済の諸事情によっては、捨て去るという風潮に流されやすいのかもしれない。しかし、2006年に住生活基本法が成立し、国は「住宅ストックを増やすために

作られた体制から脱却し、質の高い住宅づくりを行う方向へ舵を切った」、そして「新築供給中心だった政策は、住宅ストック改良と市場整備に転換された」（田中聡子「住宅政策の動向」―臨調・行革路線を契機として―）。スクラップ後の建物しか知らずに育った人たちが、逆に古い建物を新鮮にとらえて、活用する動きも盛んのようだ。

昭和初期に研究が深められ、その後長期間空白だった木構造が、阪神淡路大震災を機に研究が更に深められて成果を上げ、新たな取り組みが関西から拡がりを見せている。伝統的建造物の特徴を生かした名実ともに柔軟な耐震補強が可能になっている。先達が築いてきた伝統に学び、丁寧に手を加えながら文化を継承していく、今がそのスタート地点なのかもしれない。

(2017年10月)